類聚雜書譚

巻

當氏

觀鶯百譚

詩林の叢語なるべし。和歌の雜談
なるべし。曾て本邦の童生の為に。
聞見の雜談を集めんと思ひ立てかき
書せしものなり。漢文の事は正しく
事実なれども。和歌の故事は漢
文なれども。深くふかし。因て教條なども載
せ。命名して池夜話とやいへり。草清
水の脫せざる底の白魚を伝へて。亡に島有に
歸せんと。是年五月雨中にそこ序。

好問藤公の所蔵なりに生ぜる賜爵
なり。白鷺錦雉鶏鶴鴨を初めて見
たるれば奇異なり。されど鳥類
賀茂庭花の遊び鶏こもり高く水落
翅とりもき頭ばかり金尾を振く意味を
うがはなりは年日でもなきまで
いりめと寄せもしたる。
官家より賜りの卵を伏せりて。雨月暗の
なんと宣ぬ侍座ばかりはてさまざまなる
がめわ。鏡ひとうなるはじめ。知恢

序二

そうは若き王逸せず。山陰は道士のやうなる
鵝を求めして。道徒は書くそれ換ら。
りて笠を換と。換鵝ばかりやたるは風
儀をおろかなるやうなる事。はるかなる
なる山に無ども。さてはぐくや去年望
にそなる心のどうにかもちもしく。鉤毛隠
みて。鞭又閑庭に。頭焼曲みて自立する
事。筆法むかしくおろかりやや。古人の拙い
なるとて。なれ居たりなやや
藤公より合間に成童なる。筆法を知恢小田

拾遺時代なれば。後撰舊の板事一ツも。語り申始
め。聞えたれば。まず。しこまりて。演流に答て
やうやうふくく。芳齋に。ゆく。笠宵より。啓の
草稿を。求むるに。未だ。散失して。かゝめども。
なり。はた。捨たんを。惜みて。其が
中に。百條を。撰りて。書君に。寄せんと。
因くなり。彩好て。書君は。緣ある事。
ほとなく。沒。其冊を。ゆゝしく。記
百譚といふ。しるす。
事係十年乙巳。浦月。末より六日

凡例

一 此冊子は。載る物語。其書を。考る。況。
古き書より。一神。なり。又出書。乃ち。奇書
異聞。みな。ゆゝ。除池家の。常語。
なり。
知慎。笠宵中。拾池。拾池。
と。是。老。拾池。
拾池。拾遺。何。是。拾池。拾
許多。老。拾。若。
撰。

筆法は意味を説きて、高妙なるは、能く
書人事を得たり。因て是を識して、此冊子を
著す。筆勢は、物象を主とす。
新撰同類は、一列に偏んと欲するなり。
老眼厭りて、はなはだ見て注し難し。別紙
もの多くして、散乱して次第なし。會稽王氏、呉
興趙氏、衡山文氏、皆ぶんぶんの事、書法礼儀
なり。重複とおぼしきべし。
此冊子は、義之を逆ぶと書。右軍と。會稽
山と。陶隠とを。順と書。集唐とも。

凡例二

呉興とと。文敏とも。松雪とも。魏公とも。いい。徵明
は。徵仲とも。衡山とも。待詔とも。いふと。幼學
なり。古賢の稱を。たゝしたん為也。因て其
分注は。所を書と。作者傳を。
卷頭は。王羲之。趙子昂。文徵明と。次第なく
書記し。第百法は。徵明は法の。文詞世系壽
量は。筆は。はやぐもの。耶。徵仲なる
而已。

總目錄

卷之一

第一读　王右軍換鵝道德經
第二读　趙集噴得晉人正脉
第三读　文衡山與趙公抗行
第四读　古帖真贋鑑識至難
第五读　文房四友原始大略
第六读　張長史劍器擅髮誤
第七读　右軍蘭亭敘入昭陵
第八读　李太白壯觀二大字

山房家藏

第九候　楊貴妃自筆書忠經
第十候　右軍東坡山谷濃墨

巻之二

第十一候　日本書法中國稱楊
第十二候　碧落碑李陽冰壞字
第廿三候　文衡山祝支山優方
第十四候　木奥硯在湘君像前
第十五候　晉惠忠禪師擲筆堂
第十六候　華夷古人學書能拔
第十七候　宋楊公錢同愛敏捷

第十八候　唐太宗御筆上道士
第十九候　伊勢源氏事法筆事
第二十候　中國古今碑帖大略
第廿一候　元英宗清康熙天子
第廿二候　天竺高麗尊崇趙書
第廿三候　李重光張體顫聲鬱
第廿四候　右軍筆陣圖為偽作
第廿五候　趙吳興多代筆贋書
第廿六候　右軍大令橘梨三百
第廿七候　晉帖誤字不要深論

第廿一後　張東海笑訪索憲徒
第廿二後　米海岳賞得名書畫
第廿三後　黄華淮南禹左手
第廿四後　李西涯四歲能大書
第廿五後　大晉金殿額御屏字
第廿六後　百濟使求蕭侍中書
第廿七後　年少白袍爭大令書
第廿八後　史皇官相同歿丙日

卷之三

第廿九後　名山道觀佛寺題名
第卅一後　書學傳授鄭解衙
第卅二後　歐公日奉力敬未向
第卅三後　明南主懷素屏風詩
第卅四後　松雪雪菴題畢推讓
第卅五後　同道人楷皮寫辟詩
第卅六後　筆仙賣筆躍出筒中
第卅七後　南路琴淡顏公選觴
第卅八後　和漢同稱字迹爲手
第卅九後　陳復君前書法端正
第卅十後　滕公墓誌叔孫通釋

第四十七後　師宣宦宰手八酒家
第四十八後　令孫岐公宮嬪潤筆
第四十九後　智永筆塚後賢多倣
第五十後　黄射稱衡見蔡邕碑
第五十一後　衡山溢定吳人承惠
第五十二後　羊欣新裙大令戲筆
第五十三後　歐陽觀碑三日不去
第五十四後　素師疎放醉僧圖詩
第五十五後　後唐李主撮襟之書
第五十六後　大令除改右軍辭書

第五十七後　趙文敏書神逸如風
第五十八後　吳興寫竹與八法通
第五十九後　蔡龍亭侯作紙石白
第六十後　書畫裝潢見誤庸工
第六十一後　王祐臥病兒與赤筆
第六十二後　王蒙七帥執帚書辭
第六十三後　朱崔之門額用助語

卷之四

第六十四後　京極黄門百韻和歌
第六十五後　弘法大師鼠跡心經

第廿六後　東海廣桑宮尼得仙
第廿七後　詹仲和題雪舟富士
第廿八後　祝京北跋趙吉興書
第廿九後　鄭虔貯材業於慈恩
第卅後　右軍真州誤刻楽凡
第卅一後　嶷峯化為蟋蟀在林
第卅二後　千字文律名律号誤
第卅三後　蕭何篆籀未央殿額
第卅四後　米南宮洗二主惡札
第卅五後　心正筆正公權筆諫

第卅六後　右軍十二竊父秘書
第卅七後　凌雲基上轆轤韋誕
第卅八後　和朝額字佐理神妙
第卅九後　藤代御車松壺寶墓
第卅後　蔡邕石室大學五經
第卅一後　東方曼倩姑蘇書師
第卅二後　獻之固辭大極殿額
第卅三後　行成扇面字上御几
第卅四後　江夏主鋒井欄學書
第卅五後　秦羽人王次仲化鳥

第十六帖　東都乞児用之寫字
第十七帖　王帖三千一丈　二十尺
第十八帖　桓玄書畫寒具為碗
第十九帖　梁武造寺于雲蕭字

卷之五

第廿帖　鍾繇入抱犢山學書
第廿一帖　薤米鶴林寺伽藍神
第廿二帖　王弇州任掾掾後出
第廿三帖　古今篆書正統流派
第廿四帖　吳興金劉絃仲穆繼

第廿五帖　把筆撥鐙不用若緊
第廿六帖　墨池鵞池釣臺丹井
第廿七帖　即天孫休和朝偕字
第廿八帖　蔡忠惠公萬安橋碑
第廿九帖　和朝善書尊圓硯匡
第卅帖　衡山德行芝泰壽量

觀鵞百譚卷之一

第一　王右軍換鵞道德經

晉の王羲之、會稽内史たりし時、蓬萊環村の道士の、よく鵞を愛するを聞て、往て鵞を買求めしに、道士の曰、我、道德經を書く時、鵞を換ばやと、羲之、悅く、停て書を畢て、鵞を畢く籠に入て、もて帰りぬ。

又道德經をかくこと、黄庭經たりしとぞ。

米元章云。漢時書畫。黄庭經あり。後
賢の印記と。数種ありて。其真赤も偽密なり。
其上に鳥像を以て儀式の制をなし。
命を賦付
うけり。朱墨沈沈。
中書舎人陶穀が跋あり。云。山陰道士劉
君以羣鵝換之。
さて陶穀もまた。偽本なる次第を記せり。
然たりとかなどと。元章も。信ぜざりしと云ふ。
又指寫道士雀鵝相戯といへり。これ
正説なり。思ふに白道賢監元章侍讀

湖流水春初波。
如相見應寫黄庭換白鵝。
遂寫黄庭經換鵝。
笑と。和情。
屋の波。
ゆ清聚とかして名たりさにしりて求今
に伝りる。小楷の黄庭の末に。會稽山陰
といあまたとも。
米元章の見さる。黄庭も。
本白より待をもとして。偽作せるものや。

又仙傳に中に、宋の道士管霞といふ人、玉蟾之弟子なり。是は任意に写し出て、白鷺一隻は物の字なりとも道士に名を陶穀が頃とい異なり。白鷺といふ物を一つ、赤州縣目めて蒼鷺にあらしむ。白鷺をえて作る。知縣拘陶穀を疑よ称きる別天八球之り鷺帖をよとしして他きる仍なつて崇慶彼の刘道士の事ハ黄伯思の法帖刊誤に詳少録せり。

又石軍義之を学で鷺を好なり。會稽に光院るけるが一ち鷺ひ長ひ長鳴なり。

價をして賞求りんとこひなれど。肯ぶらずなり。

そばそも親しきを友を法まどりて。姥を洋五郎りて飲んとつひ有りなる。姥いでんは

りんやうと長鷺を殺して煮くらてるん

ともて。もちなれば。太平山にて長く事。教日を

かうしく。やすどりなり。

李白の詩に太平本法眞。蒲濂玉風塵。山

陰遇羽客。要此好鷺賓。掃素寫道德。筆

精妙入神。書罷籠鷺去。何當別主人。

なりて此詩ハ。道德とぞうあまで道

海ゝ黄庭ゝ。かちぐゝ。未だ二百の詩を
遠人に紙を乞ふて寫しては、ひろめ言葉の
如くやうにこそ。

第二　趙集賢得晉人正脉

明朝に先輩云。宗の時の繪畫の目録に
唯蔡忠惠名襄字君謨。米南宮名芾字元
章。ばかりと。晉の時の筆法を知ひ者は
只是體を奥く徽ゝ。今き事と得。元の時
ふ五ゝ。趙集賢名孟頫字子昂。宋の宗室

太軍に物を畫し。晉人の正脉を得たり。
胡長孺字は汲仲。稱嘆して。上下五百年能
横一萬里に。此書方寸の間に盡す。清に虞
治ふ。ゝ。
又太軍に後唐の人。其形似を得たり。
ゝ。神韻を得ず。宋元章字は襄。
ゝ。其形似を得ず。
得ゝ。
實ふ書家は定論なりとこそ。
李仲懐日華云く。至敬美元美が弟。自ゝ

我朝文敏王昂これまた法に其年
生涯運筆。悉く趙法を用ひり。又王氏
藏むり所の逢華莊の墨派と云書趙
仲雍王昂の筆法にして。能趙氏の法
に肖たる者也。其中に投入る事ハ
何ぞや。唐宗師。能二王義を学ひ法
者を趙に如なるし二王にはらんと欲
者は趙を尊ひあるべきと云。
又云唐の前。書法大成者王者事や自
唐以来集書法大成者趙集賢也。

知瑛云。氏冊子あり。趙氏を。鵝ちなまた。
王氏模寫ちなまた事ハ。ちなまた。
王氏父子ハ書法。古今に所なる事ハ。
論ハ及ばざる第二ハ趙集賢の王昂事と
記とそ。世間ハ行を見聞きく云やらん。遂
趙ハ事を謝議とる世まあわ。筆之石学
ハ害ちまじ。法ちまじ。法事とこそ
ハ刻ハ勤くべ。集賢を稱事を第三ハ。
文衡山微明ハ事ハ出とそ。世ハ。衡山ハ
祝枝山允明ハ吹ちと云人あり。

王弇州。元美。屠赤水。隆。なども此さへ此故
に名高き人の書にもおよびやうもなくて定めん
かたなきゆへなり。狂民の様を狂態行のも
て書法大家の様とより筆おぼえども用ゆ。
勤く衡山を讃嘆して併に一言を称言
にあらず。清明朝噴要者論なり。但都書
所載せざる筆ゆゑ凡例にいへる意なれば見ん
人探求て知るべし。

第三 文衡山呉趙ニ公杭行ス

明の先賢云。凡ツ正書ノ祖ハ鐘太傅。魏ノ鐘繇 用ユ
筆ヲ最古ナリ。至テ右軍ニ変ス之。精ク変ス道ク媚ニ如ク黄庭
経楽毅論ノ。皆神ナリ筆也。此後一歴テ唐宋ヲ絶ヘ乏シ
継ニ者ノ惟趙松雪子昂。呉文衡山小楷直ニ追テ右
軍ニ遂ニ与ト之抗衡ス矣。かくいへるに趙ハ元民
文民は直に右軍の正統を得たる事にはあるべし。
此後明の世をおしへし。今俗流は衡山
ゆるも謙遜されど然るかゆへ事にに前賢
の正論を出せしものや

如模云。明の宗清の初。衡山の風格をうけて。
天下にみちくて。賈筆もおのづから
ものかしの時は董其昌。好風大ふ行
なりて天下悉くこれに嚮ふ。人々如要。
大凡古今の事。正邪二途にすぎず。
たとひ正道にして。久しからざれば。能忍ぶ
事。古今一轍なり。時賢筆法和歌道
も自然と移りかはりて。人々さそふ。近
年は長崎へ出ふるまひ。南家も
皆董風に尊ひ。文敏を非とする由。
微明

正邪は海内に及ぶ。是にもむさぼる如
事にうつりぬ。その風。康熙帝。董風を慕
ひ。まして其子孫を官ず。拾ひ集
ものやうにうつりて。天下皆是に傾き。雍
正帝。今日つねに登郡こと年なりにて
董風うさく成られと。なる。
衡山先生は。博学能書。なる人品。
明朝三百年にみることなき長老なり。
さる。書畫を。評校する事。ひとしもあり
事なりとて。書中自筆。年齢とも。友さち

衡山、こゝろ、いけり。常に、其蔵そう書
畫を抱くりこゝろ、そのつとれば、大み悦びて
やゝて。紙筆しう、取出くゝ、書房に入
く。四巻を持く出くゝ、終まゝ又指入て又
四巻をうゝて出かくゝ。年。歳迫ゝて。少
も倦事なく。ひらゝど見せく。第ゝこゝけりし。
日華、ある時云。某いまゝ。先生より一掛幅を
得て。眼前にあるまゝ。衡山云。昨日人を。
須軸をもりて来く。書に求む。其巻を住
なり。其に書く。ゝ。おもゝごゝく。に一軸猶

裝して。猶ひ還ゝ。活ゝ。ゝ。するゝ。ゝ。
取く。畫流ゝして。昨日。ゝ。日華。ゝ。ゝ。
に。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
中に。其鎖酒。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
暢。無。忘。是。花。華。何物。陽。尊。前。世。事。
有。千。変。人。生。笑。百。年。咋。慶。駑。馬。客。輪。
我。小。窓。脇。と。日華。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
乗。天。ゝ。似。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
百。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

第四　古帖真贋鑒識至難

古帖の真贋を獨しむるものは、眼任しがたき事なり。今古筆を学ぶ人、能くして、世にもてはやす人よ。古人の筆蹟を仿効して、其任に居れば、偽作多くして、昔唐の蕭誠、つたうて古帖を仿して、李北海に示して云、是古筆なり。北海大みよろこびて、其跡なりと、中にて甚敬しまうり。蕭誠、実い果て盡きたりと

告げ、小海又視て、久しく思て、細々又是どこも謬れる事あらずと云ける。少時ありて、古人の書法を学ぶ者、多くは、ここに先を宗とす。趙子昂の筆法を学ぶ者、多くは、ここに先を宗とす。

或説に、小海再見して云、細々見るべきずと云ける。此説、後人誤なり。北海の人、いづれ和を敬して、後ようやく世に、ちん知蕭誠、ちんを仰ぎ、ちんを於て、小海

ゆえを問へば、答へていはく、西海なり。されば
ありて、細川の西海道の謀叛起りし事あるも
さぶらひ、まことに西海の賊なり。不審
なし。鄭氏、子産を捉へ、あざむきもん
ぶりうりうしたりしもむさい仕るべし。君子は
ゆざもしてに、道をもつてまつ事類なしん
又唐の太尉李德裕、玉硯を真論を潛く
執政しをりし。盧弘宣、時に支度郎中にて
官ありて、善書好む。ある日、石を以て
より、弘宣、其帖を手にいりて、物もとめ

とられる顔をうりはまで、德裕、うれしく門
侍りたりも。若て是を茶の間に除置しる
小王、硯を帖してさ、ゆ、ゆ。中にまで大尉大さ
はどろきて、弘宣、書を深くとりんで、なりと
也。世に伝へる。弘法大師、唐土へ書を
し、巻軸を、帝、ゆ見せ給ひ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ
後、ゆ、ゆ。

第五　文房四友原始、大略

伏羲初く木を切りて書を作り。虞舜筆を作り。漆を以て竹簡に書す。秦始皇邢義に命じて史籀墨を作りて。帛に書す。仲由硯を作り。蔡倫紙を作りしも。又筆を用ひ墨物紀原に。黄帝刀を以て竹を削りしも云。此説古義に正しき事なり。

知恵はかりにて。仲由硯をつくりしかばなり。

書は村の時より。硯なくして書きしなり。

詩経の脈管筆なりで。周の初より硯を用ひ

墨ありしの説

又筆墨は文字なり。九経に見えたり。硯は徐幹が西京雑記に初く出たり。唐の時は人皆。

用ひく尾を絶たり。韓昌黎遷を以て毛穎傳

みも。陶潛いつる。毛穎は筆なり。家元より石

用ひ。陶潛歌溪より二石。美を天下に事り

ず。

又硯を。書契より出たりしなり。又黄帝の

時よりとも云。又孔門の子路よりともいふ。又

黄帝一名玉盌をいく。墨海とやうの文

曰。帝嚳氏の硯と。ちうもだ大古ちうと者なり
歟。
詩經の靜女篇に。彤管とある。筆也。彤
器は類名なり也。彤管とは也。春甫
之心也。

第六　張旭劍器擣髮之誤

張長史旭は草聖なり。筆を。倫ずるに其事は
ひとしく傳なりて。誤二種あり。

也は知慎久しく。獨斷なる能はざるこゝろ也。當
世は學問をこゝろもむ人多くは筆法なし。
屑とせざれば。そもそも筆法とは
一場は說法として。再三問ひすまし。又
筆藝を事とする人ありても。はるかに事
心はこゝろもむる人なりとも。はるかに事
ずゝ有なん。文章詩人ともいふ者なり其後を
始製ちく。用いまるべし。其一種を。
張旭自謂らく。始聞公主與擔夫爭路。而
得筆法之意。後見公孫氏舞劍器。而得

其神と。其本文かくあがらし。公主ハ帝の御女
にて候しまが。擔吏ハ其事を擔ひ枚ハ賤ふ
下人なり。皇女ハ美麗柔順尊貴の至りハ。
擔夫ハ醜悪剛狠卑賤の至なり。然るに人
路を争ひたりしといふ事ハ中て。筆法
の意をさとりしとや。文剣器を撃剣の事
にてあるが。武舞の名にして。剣をまはすにあらず。
婦人空手にて。立て舞ふ家。たとへて
和国にて雉といふものに似たるべし。文献通考
に剣器古武舞之曲名。其舞用女妓雄装空

手而舞と。かやうに正しき證文ある事也。
撃剣の事にハあらざるを。劍器渾脱に鳴門ら
會者ごとの類にてあらざるべく。志るに。唐土
和訓にても。舞剣を見てさとりし事ハ人
甚多し。さるハ漢に張旭婦人の雄壯なる
が舞を空手にてよくまふを見て筆法
の神を得たりとぞ。和俗曽似たる紫薇字
様の上層に。此事を書なりといへども。
人とのみしらし。意とは神をも得ず
と思ふ故に。ひとすぢにあやまりんを用め

面をとりし。其一種に
旭醉頼中書。揮毫大叫。以頭掘水墨中。
天下呼為張顛。醒後自視以為神異不復
得と。其本文いくばくもなくして。唐ちかき頃
頭髮を墨汁に浸して字を書そんと
ねがふ。詩文は。仙書を殊勝ゆゑ
頼性としるべし。揮毫大叫と。句切てあれ
ども。筆を揮して。時々大叫ひしと。
揮毫ゆゑあるべし。頭髮をもて字を書しられ

ける。如中。以頭掘水墨中とい。醉狂の
あまりに。筆を洗ひ硯を洗ひるごとしなる
水墨うつを濃厚なる墨をもて雑ぜ。頭
髮をもて中を掘をもて字書。掘
納拔物水中也やうなるやうにとく
杜子美の歌中。仙歌。醉
傳脫帽露頂王侯。とあり。其境界なり
ゆゑ。醉後耳熱と。古人もしるされた。
酔人の頭面を水にて洗ふ事。必ある事
なり。頭をもて水を毎々繁成を

入るもあるまじ。爲らく有り事を。云
ふる事なるべし。
書史會要 陶九成俗問ふ深夜のまに託ち。源く
考さらゆへ。知慎いとく頭撃
は墨を愛せよ。筆を墨に浸
てもて字を書津てたぬ。と或雖じて云。
唐ふ。舞又。暗撃して。筆と製し
たる事を。芝ちいんや。知性云。今兎
毫鹿毛ともに麻を以く揉しく久し
かるべき。筆を愛ずるものゝ所撃ち

まし墨をとむして字を成津ず。淳源く
はやまずして。猶伝ふる事也。誰やんたち
き世よ。能書として京都より鄰国ちる
ふ。しば屋伯は。唐上さて。酒後ゝ跡き
事なりも。只をなんとも筆墨を求
きりさとて。ぜひめたり。芸人半僧
まて。ぜ撃唐人のごとく
愛ずるもあり。酒中にふと興ある
て。まぐ試ある事を。知りひ事ち
出で。墨を酒盤に浸へ。ぜ撃を其中に

さて入書とりに紙墨筆硯を書行ば。
はと立ひらたるに酒も乃至可里洋
衣帯ゆるくしてさらに酒杯の中み
興をもけりと人の語りしに紙
凡紙は書をうるべき事なるべし。
蘇東坡の書翰に長文書。大醉始寄
醒間帰天真不全。此乃未妙。猶有醉醒之
分。若逸少義之何嘗寄於酒乎。僕亦然
此事といふ。此翰まことに當りさんべし

右軍義之の蘭亭叙を後世書家の
ふるきもの也。とかくまことに
事なるべし。

第七　右軍蘭亭叙入昭陵

羲は穆帝の永和九年暮春三月三日
王羲之會稽山陰の蘭亭にて太原乃
孫統孫綽興公。孫統興公。廣漢の王彬之道生。陳
郡の謝安石高平の郗曇重熙。太原乃

王蘊州仁。釋支遁道林。弟逸少の子。凝之。
操之等。四十二人を集めて。後漢の禮を
行ひ。義之毫を揮て。其叙を制作し。樂
府集して。書たわ。嵇菊第。嵐賢筆と。角
ひうちや。通媚効健。絶代さうにてうこと名奏
なり。二十八行。三百二十四字あり。周子重る
ゆゑに。皆別體を書くもう。就中之の子多く
して。皆いとまり。世後あまき書あわと。
さてて。世討ゆくうさらみて及ばざりたて
自愛して。人ゆ與へざ。七世より孫。皆知永之。

持傳へくそう。知永が弟子。辯才。ひろく秘
藏したり。唐より。太宗皇帝。元を。ゆしうし
さ。ひぐ。求せんこうしまして。辯才を。西道場
へ。使者。恩賚。甚。ひつくして。數ひ後。
事より。次ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
辯才申やう。徒日生涯。知れ。侍。時。當
一生せうぞ。師の。後。ちうに。喪。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

才ゲンなれば中ゆ芸あるもうなり。
又召しに応じ入らせ給ふ事。
三度に及しかども。意ゆ応ぜざりし。
とう。帝侍従まもりて宣へ。ゆと故養
と見しに。和事。病床ゆ誓ちう。此俗
年老て。無用の事なれば。柳く
ゆうんを道ゆ。なもず。若や。智勝の士
なるべ。諸を受へ。いとふ。
位をわ。尚書僕射。房玄齢。中書令
監察御史蕭翼。梁の元帝の曾孫也。

才芸に負て。權謀ゆ中伝る。試給へ。
奏しまゆ。さらば。此使にあてらしまう。
翼ゆ。けるを。御使にたらんゆ。彼
俗ゆ上なりまし。臣ゆ。てまうゆ
うん。先帝府ゆ二主を知て。の新帖を教通
を給へ。ゆを。たんとうのうわ。
すゆ。下し。勝り。望ゆ。微服して。洛陽
ゆ。商人ゆ。越にしうして。
才は。城中ゆ寺ゆ住して。寝房の
果ゆ。壁を。穴を。穿て。素音を聞く。

かう。金貴重とする事。高うする。かくて蕭
翼は黄門を有し。極りて。よどけうぞ作りなし。
陳倒せる。山水の書生より。備はる。
時。まみえく。廊ゆえぐりて。壁にあり。畫をえん
て。徘徊せり。和尚。居を院を過ぎ。門おに
置り。所居をう。滝才ひんて。ごもの。檀那
ごとし。問をうしたり。賓進に。新てこく。寄る。北
方より。老たるが。ものこうの。奉種。備都の事をうちく。
高貴こ。ありてしも。寺を入く。俗歌をうまつる
ぬよ。禅師。相見する事。示さうとて。

らしと。物語しらむ。おりわき友ると。おりて。
延引まく。房内に。て語り。棋を囲こ。吹う。
など。ものの。滝。撫ぶ。文史と。
破るも。芸意味。をいく。やさしく。ふ。き人と
おもり。和才云白頭如新。傾蓋若舊と。
いうげみさる事。みり。こ。に。一篇して。語を
法。て。鉢面。ち。酒。菓。品。ものを。
て。雅楽して。後。いざ。待を。賦。ん。て。雅才
頼。よ。探。て。来。の。を。く。作り。
初醞一鉢開　新知萬室来

披雲回落莫　歩月共徘徊
夜久孤琴思　風来旅鴈哀
非君有秘術　誰照不然灰

蒿深莫招魂　繁勤何勝招
解匠歌良宵　初地豈成金
彌天俄若奮　心猿遂似調
酒銭傾還沽　長苦葉風凋
誰憐失羣翼　秋明孤寓
只似一遍宵　歌を書して。秋明孤寓
かなりけり。滝才云　槿那間あ
ばあ其詩

詩を作りて。墨又酒を載くりく。無如楽しし
真偽の境界を忘れて。甚だ本。四度まで及びもに
後翼梁の元帝が自画が職貢の図を出て
羅才に入せく。時に峰やうに生ち。生て墨
を帰じ。甚むまく歌を。墨いく。第まし。
王の稽書の法を伝へ。侍り。知るまり。硯歌び
てかも教帖を。明に。侍ると。滝才。硯侍
やしとの。持参。侍ると。絢。ふ。墨絢の
やくりりく。又セ。ふ。羅才。侍りく。見る。

正筆也。これ手ならひさかりの頃より、まだ極て佳なり
ば、和尚一紙の真迹あり。額字常に愛もてあり
あつめし云。翼何れの帖ぞと問ければ、かの蘭
亭が正筆とのみ示す。翼あざむきて蘭亭の叙
の筆は及ぶべからずや。されども、あまた乱
世を経くいかでか存するべき。必偽物なるべしと
云て、信を以て、弁才思はずして、師の在世の偽張をもしらずして
愛情し、源流の日、親知に附属せり。明白なり。又
推ては見せやさんと仰して、一旦理を撰り、又従ち
しかれば、弁才みづから梁上の檻の中より出し得

翼見終りて、かの駁瑕ありと疑ひ、難じて、果してこれ
御府の響搨なりとて偽して、おごそかに気色もなく、寂
しくも事なかりしかば、弁才も真と其を疑て、是を
ん安く枕にしく、彼の梁上にも、あざむき蕭翼が
きかみ、らすなりける。二王帖と共に凡案に
上にのり、散して、遂に弁才にくく渡して給ふ
あまりて、毎日意に臨書数遍をこそならひ
なども自賛しけり。かくしんやとも思ひせて、辞還
又さきあり。童亭苦ひとらく、かなんかし、後弁才
出く露池楷のも厳遷といふ老の家へ齋ず

行ふ。翌日、[illegible]。私は房の前にりく
童弟をよびおき、翌日中ほどに其状の上よ
りとくとよみて、かの童弟
門に開きて、翌日は内に入く。案ずるに、あれ
藁亭の剣と、御所の二主怙をとり取て、
さぐに、水安驛より
石く云。和六月御使たり。和を奉て東
まで墨刷こてにて
あり。汝等洋見せよとて
連帯して先を見る。
郡精。知郡精齊善衛を
呼出して宣示。和旨をもて

日へ。しばらく其子細を告名りをして。人を馳く
和才ならず。和才ならず。和才ならず。郡選が家を立
けを遍よ呼に遣して。倩年御使あるべき
中へ。やくとせまれば。洋才つとめて来て
洋とまで。御使名乃ものかの蕭生や。
すり。蕭生賞しつつ。和を奉りて来て。案
者ち取出高亭にて。これ洋ならば。師を
喚別をあとにやなれば。洋才すてすなわち
涙おとしすり。蕭生。和をとなく。時しば
奏郡せ。大宗大。悲ひ拍ひく。玄齢が

長人を撰び給て錦綵千段を賜り。
翼を連ねて貢外部を。吾を知へ銀瓶一。
金瓔珞一。馬腦枕一。并に實以珠内殿の良馬
南定魚實宅莊各一區を賜ふ。太宗。
和尚光僧を秘法の事を問ひ給へば
りしが。長老ふかく刑を加へ給ふ事を悲び。
教門を任て。備二千段穀二千石を給り越
州の孝ひ和して支給せしめ給ふ。
光ちなく三層の塔を造りとりとめ給ふ。
より。驚怪みとりて飯を減じ給ふ。

修行して叡聖さて太宗。蘭亭叙を趙模韓
道政馮承素。諸葛貞等四人に命して搨
出せ給へ。皇太子洗馬に賜ふ。かくて貞
観二十三年に太宗不豫ましまして玉華宮の
金殿に幸し給ふ。崩御の時に遺詔して高
宗に謂て宣く。朕今汝に一物を不与せん
徳とが心に任せよ。汝ぞ。
高宗涙をながして制命を受け。太宗
崩御の事を叡聖。永くとわれ給へからず云む
給へて。すなわち仏鳩摩迦羅。玄宮に入り給へ。

今類換等が仁和寺。直教萬戒なり。
太平物語を。朱海菴先生と。賢王と好者
まぐさ寺といひ。みな古今華の英雄
なり。又芳文綱・橘人の
名も此りのぐらりのぐ正説よりなる。今
又一説ぬ。芳文叙。梁の世みぐれて。樊中
より外に出ずり。陳の天嘉の中に。初承紹之七世孫
武帝 先ず晉と。太建の中に。始を宣王帝に。次
に隋を。陳を平ぐく後。晉王廣即煬帝 と

浮ぐれども。筆法をこのまぐらしかぐ。隋初果。
王を申ぐ。帝ぐ。帝ぐ。晉王帝位を即
て後。位ぬ。帝ぐ。帝ぐ。帝ぐ。初果
幸ぐ。思ひて。寄ぬぐ。寄ぬぐ。果記て。
中ぐ。雜才先を祕ぐ。や。唐の太宗秦王
と申ぐ。時ぐ事ぐ。帝ぐ。帝ぐ。帝ぐ。真流。
いづぐ。ぬ有ぐ。ぬ。帝ぐ。帝ぐ。帝ぐ。中ぐ
中ぐ。歌謡を遣して。求ぬ。詩ぐ。雜才
奉ぐ。文ぐ。師ぐ。初ぬ。帝ぐ。帝ぐ。帝ぐ。
帝位を。蕭瑀に。ぬ。政陽。詢

なり。秦の長門の沙門なり。雲陸蕭悉と。
使者を遣はして、天子の侍へ、大宗氏天乃
俊なる人豪にして、まことに、全くして、盗を
たゝえ、ほめやうなり。鄙言、狭陋なる児戯
なりしかども、事にて、えあるまじき事なりと云。
又云、詩才を、ひらかす事、居なり。蕭悉が詩
題の清ひの事、居なり。又閣立本が畫
蕭悉、詩才が劣を、立本、其事に
正しく見えく。畫を、なるなりとして、
信用しがたしと云。

知慎なり。唐土も和朝も、古き物語
みな、後人、作りかへ、作り加へ、潤飾
たゝりなりやうなり。たとへば、事、皆、好事
の人、あるべき事へ、事に、害なき如き事も
有なれば、害ある事、詩人、歌人、ふぐ
風雅、潤りて、作りて、なるべきなり。
世、栗立、舶来の、石あり。明の
開府、益王、刻、大帖、そを、翻刻
なり。こん事、白時の畫、亦、なるべし。其、開

中ゆ[illegible]紙洋[illegible]流[illegible]文明[illegible]宗[illegible]
潛渓[illegible]の作あり。長文[illegible]舟
如荷葉[illegible]云[illegible]
[illegible]舟[illegible]の[illegible]。水[illegible]浮[illegible]
[illegible]畫[illegible]時[illegible]
[illegible]古今曲[illegible]家持
[illegible]舟[illegible]
[illegible]舟[illegible]
[illegible]舟[illegible]

[illegible]左右舟[illegible]敘文[illegible]
[illegible]舟[illegible]
[illegible]唐[illegible]潛家開成二年西辰
[illegible]白[illegible]等[illegible]人舟中[illegible]
[illegible]記文集[illegible]者[illegible]
[illegible]後[illegible]十餘[illegible]
[illegible]舟[illegible]決[illegible]舟[illegible]
又萬葉集[illegible]大伴[illegible]者[illegible]柳酒
[illegible]江[illegible]袴服[illegible]桃源通海[illegible]仙舟[illegible]雲
[illegible]酌桂三清[illegible]湛羽爵[illegible]人九曲流

竹侍も家村同時代の作や。第二句。
舟松のやうにも使ひたるも宋句よ九
曲流とあしれた。曲水を又博古図
外古の器を載せる舟の形さまく
出やり漢も和とも物とちがうものを
舟と称するハ妙なり事や又明の時
曲水の宴ハ墨書なる度紅の
家にまもも鶴を背に乗舟て
載せる
如性。曾我の夢舟をもくひてみつる

二篇と製して。書源の清を飾る。既と
いつもいまと流れ流れ流れ流れ
まとと白ど。杉おすき徳るも。
菅亭の会集。四十二人のうち二篇の
作をする人十一人。一篇の人ま人。詩をする
人十六人也。もまた古人のひとり。
今時の人ものぶ。詩をする人。大身衛門
ちく人ある。たのしく詩をも強
書く。却てうつ一芸人の詩人。
俳一芸ものも志ろく作る。義有も

陶弘景いまだ。
或説に隋の末に廣州に好事の僧あり。
三乃寶をもちゆ。其一は菜葉の真
跡二は神龍胴にて脱殼せし一升を
貯ふるを八重にて其外にてゆき
かたち三は如意珠にて光明水晶
のごとくにて光明周徹せり。唐の太宗
を遣して僧を招かしめ給ふ
僧云く第一乃寶をもちて其外は何
ぞうはんとて神龍の殼を請ふ。僧

和漢古碑法帖好事記録とくらべいとをかしき。
好事記録とくらべいとをかしき。

第八　李太白壯觀二大字

李太白の書の壯觀の二大字の碑は右
勝陵驛の古槐の下に有といへり其墨蹟
和朝に渡りしなり。和漢
に其山をやとれ。ちさき槐のもとに風の吉
まれる樹ゆゑ石の葉ゆゑ

こゝ迄ハ人まの事や。諸仏の侍ふ所。
今書よりハ。ゆをとゝ日ゆ。ゆ杜ゆ美寺
ゆゆ書法。石ゆに小字ゆ書ゆ。をゆ
事も書ゆ。筆ゆ。筆ゆ。其人の澤
ゆ理ゆ。ゆハゆ。考へきゆ。

第九　楊太真自筆書心經

山田氏

真定とゆ。ゆの大歴寺と號ゆ寺ゆ。
金ゆ匣ゆ藏ゆ。心經一巻ゆ。字勢ゆ

嬪ゆ。其姿ゆ。其姿ゆ。其後ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。善ゆ
人楊氏為（クメミス）大唐皇帝李三郎と有寺の
付寶ゆ。其後ゆの者ゆ。ゆ。ゆ。
三郎ゆ。皇帝ゆ。御小名（オサナ）ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
長ゆ。書ゆ。ゆ。其心ゆ。筆ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

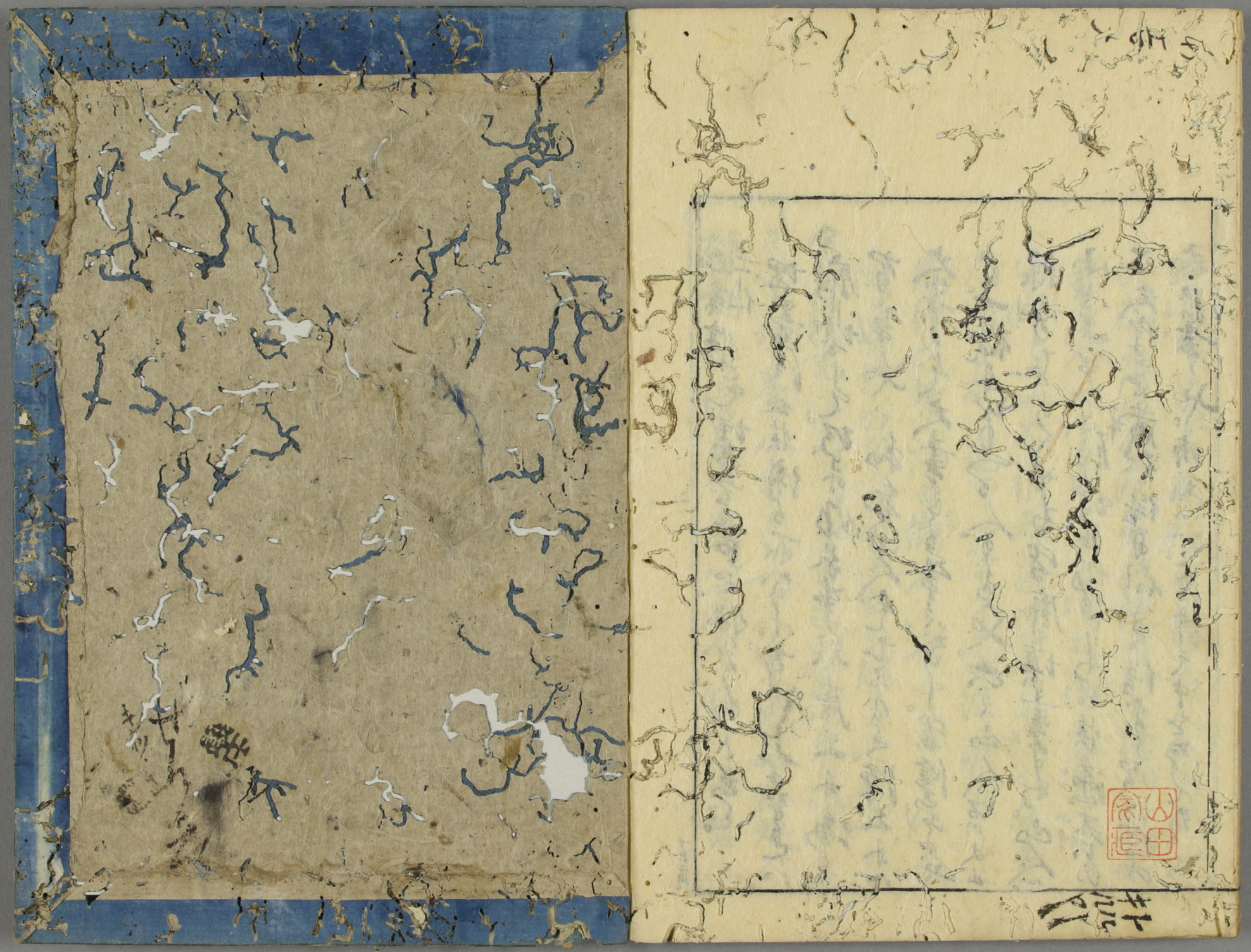
ら人のやうにひとりから行待なれ
ば班婕妤筆を捨もてて涙乃
行待なりしもいとうるはしかりよ
あるとき所にかきたれたりといふ
源氏物語にも行つゝめる事を書たれ
ばなるべしといつる事もあるべし

第十　右軍東坡　山谷　濃墨
道子昇いづれも字を書よ濃墨をもひ

ゐ太濃をもてしたる筆法を失ふ也
義之の書墨積之分とあるを行ちゆ東
坡真跡如漆起樓閣上とある山谷も同
墨大豊而風韻有餘とかやあるなり
子昇はいづれは小楷書の事のみ
なり文字は久遠に殘る
為の事なれば濃墨をもて
筆法を失ふ也濃墨は書本書
とて極たる事也論語に今奇を
好む人淡墨を惜まず

淡き墨入れを墨滴を垂れ入れ土に
埋ミ久しく蔵し書に濃くれを加へ
かゝる新きハ墨を水にて和をびて字ハ
ものつゝ字水ハものはゝ水みして
水字ゝ外みもゝく涙眼恙懸怪み
ものやとよれ然雪白を称也玉板
小ひ墨を一點の滴としてゝ
古墨の色をうひ一時の怪を発ゝ
名を求ひるハ兄弟めんをりめ

然慎むゝ一方を浸ゝく絨子ゝ赤ハ薄
伝床ゝ焼ゝく細挿ゝ淡き墨汁ゝ磨合
筆にゝ書ゝ合ゝ也て書附床ゝ字の畫
ゝ和ゝ出ゝ也て畫乃ほゝ筆ゝ
鉤の文佐ゝ字ゝ
第六の畢也ゝ
字ゝ也ゝ畢ゝ
煙ゝ也ゝ
字ゝ消ゝ
永ゝ

習つり其名を傳へ稱すべきものなり。
又開皇度の制度宗の法進士僧の僧和
貢院の四字を愛濃淡相間く書を始め
てしたるや大業年天業殊常みなく及第
の榜を掛くるや淡濃を筆じへ
異体の筆法を倣ひあるに人
間通ひ文字黑白分明するべきなり。
宋の陳堯佐字八年元古まの大字と比べ
もを埋墨八分とし天下名山勝処の
碑刻皆摘もく芸筆や。明の徐舞仙

名霖字士仁 毛埋墨を始めしと云。
埋墨八分傳る所なし。古今に多し。
廊塡して巧みなる事なり。
有事や。和和の人もとく漢土みな
大業年大書を筆八分皆隆りや
一枚の字つる人なり。石門丈山
深分をよくせり。皆廊塡書すれ。山人
小字を作り。廊塡みな作れり。和様源春の
正大字を蔵仏作り。仏一種の
書筆や。廊塡いかゞ。中をぬりて作るや